

逸見政孝 著 補筆 逸見晴恵

ガン再発す

廣済堂出版



ン再発す

逸見政孝

著

逸見晴恵

廣済堂出版

ガン再発す

1994年2月28日 第1刷発行

1994年3月20日 第60刷発行

著 者 逸見政孝・補筆逸見晴恵

発行者 櫻井道弘

発行所 廣濟堂出版

〒107 東京都港区赤坂6-17-5

電話 03(3584)7610(営業)

03(3584)6123(編集)

振替 東京 8 - 164137

印刷所 株式会社 廣 濟 堂

©1994 逸見晴恵

Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります。

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-331-50434-4 C0095

はじめに

逸見政孝・晴恵

はいめに

胃のレントゲン写真に「これはこの物語の
主人公の胃袋である。幽門部に胃癌の兆候が
見えるが、本人はまじろ知らない」というナレ
ーションがかかぶさる。黒沢明監督映画「生き
る」のフリストシーンである。

私が昭和三十九年、早稲田に入学した年、
友人に誘われてこの映画とわたしのなか、その
後、黒沢作品とむきあはるようになった。見るように
なったのは、入りに「た」の作である。

志村喬演じる、毎日毎日ハンコと押さる可

の死に、ようは、居る役所生活を送る市民、
長い年月の不調から自分へ癌であることと察知
し、残された生命と児童公園建設に賭けるこ
うになる。お役所仕事特有の幾多の困難と殊
々に時間との格闘でのりこえ、ついに公園
と完成させ、雪の日にはプーニコにゆられ、
うさぐさでゆくと、いうスリである。
柳入歌として使われ、いるコンドウの唄の
一節、命途のしきせよ乙女しかまこと、に印象
的であつた。

2 の映画と、それから、おおよそ三十年、私は自分
 分、カンで、あることと、告知され、それと、テシ
 といいう大デ、アと、毎いて、公衆、あることには、
 うとは、夢想、に、し、た。
 生、ある、は、と、う、い、う、こと、か、も、い、命、に、期
 限、が、つ、け、られ、う、という、大、な、問題、を、自身の
 こと、と、して、つ、つ、つ、け、られ、た、の、で、ある。
 記者、会、見、の、意、外、な、反、響、に、戸、惑、い、な、か、ら、これ
 ら、い、ろ、く、の、方、を、バ、ウ、ン、と、し、て、下、す、な、ら、
 開、病、生、活、に、来、い、は、その、間、の、心、理、状、況、と、何、う、か

の形で昔より殊に、病にあらざることを考へて
少くも、次第である。

私より、むしろ、過酷な状況で、いかに、

苦痛を耐えて、癌と戦つて、いかに、いかに、

多く、いかに、いかに、二と、考へ、時、本當にお

こころしい、いかに、いかに、癌は早期発見、いかに、大

切、いかに、いかに、あつた、知つて、いかに、いかに、思ふ。

勇氣ある、手術と、敢行、これに、東京、いかに、医科大

学病院の、羽生、富田、教授、東京、杉陽、一足、いかに、

いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、いかに、

う お (厚) り と 下 上 っ た ぶ と に へ か ら の 威 凛 の え
 増 と 七 し 2 お 3 た W 。

あ
 目
 ひ
 え

*

「これから先、どうされるのですか」

いろいろな方が心配してくださって、よく聞かれます。マスコミでは負債がどうのとか、息子の太郎や娘の愛の今後についても、いろいろな憶測が飛びかい、本人たちの知らない話がまことしやかにうわさされました。

でも、私にはまだ突然のことで、気持ちの整理もついていなければ、先の計画をどう立てようか、もう少し時間がかりそうです。

また、主人がかかっていた病院のことでも、いろいろ書きたてられて、人間不信に陥ってしまいます。誰を信じればいいのか、途方にくれているというのが正直なところですよ。

でも、こんなことでは主人の遺志を継いでいくことも、子どもたちに対して親としての責任を果たすこともできません。

配偶者を失ったとき、人は自分でも想像できなかったほどの思いにとらわれるといいま

すが、今の私がまさにそのようです。

主人の仕事を軸にしての毎日が忙しすぎ、私自身、振りまわされてしまって、もっとやれることがあったのを見落としてきたのではないかと、そんな後悔があります。

あまりにも短すぎた主人の一生を思うにつけ、私自身の人生というものを、ここでしっかり見据⁺えておかなければならないと、初めてそんな気持ちにもなりました。

これから主人に代わって一家を切り盛りしていかなければなりません、その前に、うわさという自分の本意でない流れに飲み込まれないように、自分自身の気持ちを整理しておく必要があります。

最後まで生還を信じていた主人は、ついに遺書を残さないまま逝^いってしまいました。メモの断片すら見つかりません。何か残っていれば、これからの手がかりになるかもしれないと思っていた私は、しばらくは呆然^{ぼうぜん}としたままでした。

でも、考えてみると、ふだんからなにもいわない人でした。私もずっと、それにこだわらずにやってきました。いちいち確かめなくても、これまで特に問題は起きませんでしたし、大きな行き違いはありませんでした。夫婦とは、こんなものなのかもしれせん。

そう考えたとき、私は遺書のないことを残念がるのはよそうと思いました。主人は最期まで、私たち夫婦のやり方を変えなかったのです。いつも几帳面^{きつようめん}で、いただいた手紙には、どんなにたいへんなときでも必ずお礼状を出していた主人です。

主人は闘病生活に入る前にガンの告白会見をしましたが、それは社会に対する責任を、ああいうかたちでとうとしたのだと思います。

しかし、私たち家族には、自分の死後、こうしてほしいという言葉を残さなかった。それは、最期までわが家流で通そうとした結果ではないかと思います。

いわなくても、わかっているだろうというのが主人の残したメッセージだと、今は確信がもてます。そう思うともう、どんなことにおつかっても、これは、こうするのねと、答えが出るような気がしています。

十二月二十二日に発作が起きて、二十五日に息を引き取り、それからお通夜、お葬式と昨年中は考える暇もありませんでした。年が改まってしばらくたった今も、なかなか落ち着かない毎日ですが、テレビや新聞でいろいろなことが取り沙汰^{さた}されたおかげで、おそまきながら、目をさますことができました。

ぼんやりしては、主人の遺志からどんどん離れてしまいます。一日も早く区切りをつけて、主人がやり残したことを一つ一つ片づけていきたいと思っています。

この本の発刊計画は、生前からあったものです。主人は本当に生還するつもりだったので、その闘病記を出すべく準備を始めていたのです。

手術の経過はよく、その後の検査でも特に異常がなかったのですが、本格的に記録をまとめるつもりでいました。その矢先に、腸閉塞（ちようへいそく）を起こしてしまいました。どんなに無念だったことか、それを思うとたまらなくなります。

闘病記といっても、途中で終わっているわけですが、なんとかして主人が最後にやり残した仕事を完結させたい。そんな思いで、私が慣れないペンをとることにしました。

病院メモは、主人がペンを持てないときに備えて、夫婦共同のものにしてありました。太郎と愛の言葉もあります。

途切れている主人の言葉を書き足した断片にすぎませんが、今ガンと闘っている多くの方々と、そのご家族の参考に少しでもしていただければ幸いです。

そして、この本を逸見政孝への追悼記、また私たち家族の思い出の書としてお読みいた

できれば、ありがたく存じます。

最後に、この本の執筆を天国から、おそらくはらはらしながら見守ってくれていたであろう主人に、心からの感謝を捧げたいと思います。

逸見 晴恵

も・く・じ

はじめに——逸見政孝・晴恵 1

ガン再発す

ガン告白会見——16

熱い激励——24

生還への闘病日誌——35

手術——取れるものはすべて取った——43

成功、ガン克服の足音——55

私の耳に「助かる可能性」——65

立った、歩けた！—— 81

家族フルメンバ—— 92

結婚記念日—— 112

すこぶる快調—— 123

激痛、外出許可が取消し—— 132

第二の闘いが始まる—— 141

パパは大丈夫よ—— 151

最終段階—— 161

まあちゃん、ありがとう

愛はパパの子—— 172

暗黙の了解—— 深刻な話はしないで—— 180

昭和四十三年、夏—— 195

「きみは家を守りなさい」—— 208

私の夢、主人の意欲—— 224

まあちゃん、ありがとう—— 238

あとがき—— 逸見晴恵 246